

# アディソンとサマヴィルの疑似英雄詩「転球場」

海老澤 豊

18世紀前半の英国で流行した疑似英雄詩は、『イーリアス』や『アエネーイス』などの古典叙事詩に見られる種々の約束事を踏まえながらも、高遠な文体で卑近な対象を描くことによって生まれる滑稽さを目指した。疑似英雄詩の下位区分に分類される「戦闘詩」は原典にもっとも近いが、アディソンの「ピグミーと鶴の戦い」やパーネルの「蛙と鼠の戦い」のように、叙事詩の英雄を卑近な動物に置き換えて描くことで、形式と内容のずれを眼目としている。<sup>(1)</sup> さらに「戦闘詩」から派生した「競技詩」は、戦闘場面をスポーツやカードゲームなどの競技に置き換えたもので、競技のルールや使用する道具について説明する教訓詩的な側面も見られるが、本質は競技者たちの苦闘や災難、そして勝利と栄光を面白おかしく描くことにある。本稿では17世紀の後半から18世紀の前半にかけて、ローン・ボウルズ(Lawn Bowls)を題材にして書かれた3編の詩、すなわちウィリアム・ディリンガムの「スールヘイの転球場」(1678)、ジョウゼフ・アディソンの「転球場」(1698)、ウィリアム・サマヴィルの『転球場』(1727)を取り上げ、「競技詩」の特色について考えてみたい。

## 1. ローン・ボウルズ

作品を論じる前に、ローン・ボウルズに関する当時の記述を紹介しておこう。チャールズ・コトンの『賭事師大全』(1674)によれば、「ボウリングは適度に行えば、体にとっても健康的な競技あるいは娯楽」であり、競技を行う場所や用いるボウルの選択が重要だという。すなわち「平らなボウルは囲われたレーンに最適で、丸く錘の入ったボウルは開けたグラウンドに有効で、ボールのよう

に丸いボウルは広々とした平坦な緑の原に向いている」のである。コトンは「経験こそが最良の教師」であるから、さまざまな場所でローン・ボウルズを実践するように勧めている。また投球の際に体を妙にねじったりせず、転がるボウルに「延びろ」とか「止まれ」と声をかけても無駄だと忠告することも忘れない。コトンは最後に「ボウルズは浮世あるいは浮世の野心の寓意であり、大半は短かったり、長すぎたり、離れすぎたり、間違った方向に偏ったりで、恋人たる「幸運」まで他を押しつけて近づける者はわずかだ。宮廷にいるのと同じで、(王の)最も近くにいる者が最も意地悪をされる」と締めくくる。<sup>(2)</sup>

ストラットの『英国人のスポーツと娯楽』(1801)によれば、ローン・ボウルズは13世紀に遡る球技である。開けた緑地(ボウリング・グリーン)か囲われたボウリング・アリー(レーン)で、片側に錘の入った(したがって曲線を描いて進む)ボールを、的(ジャックと呼ばれる小さな球)の一番近くまで寄せた者が勝者となる。イングランド発祥とされるローン・ボウルズは、かつては非常に人気のある娯楽で、ボウリング・グリーンはどの田舎町にも見られたし、ロンドン近郊にも残っているが、昔ほどは興じる者が少ないという。

また編者のコックスが追加した注によれば、ヘンリー8世は弓術の修行の妨げになるという理由で、1511年にボウルズを禁止する法令を發布し、さらに1541年には年間100ポンド以上の収入がある者だけが自分の所領でボウルズを行う権利を認め、それ以外の者(労働者、職人、徒弟、召使)にはクリスマスに限って「主の敷地内で主が見守る中で」ボウルズに興じることを許した。だが国王自身は、ホワイトホール宮殿に設けられたボウ

リング・グリーンで、貴頭たちと金(国費の一部)を賭けてボウルズに勤しんだとされる。<sup>(3)</sup>

『カッセルのスポーツと娯楽事典』(1891)によれば、エリザベス朝の時代にはどんなカントリーハウスにもボウリング・グリーンがあったが、19世紀になるとローン・ボウルズの人気は衰えたという。しかしローラーをかけ、草刈りをしたボウリング・グリーンは、完ぺきな芝生の模範となるべきものであった。この競技に必要とされるのはすばらしい競技場すなわち「グリーン」であり、長さ60ヤード、幅30ヤードを下回ってはならない。また競技者の倍数のボウルと1個の「ジャック」が必要となる。ボウルは通例「ユソウボク」で作られ、片側に鉛を錘として入れて「バイアス」がかかるようにする。ジャックは木製か陶製で、ボウルよりずっと小さい球である。<sup>(4)</sup>

17世紀の文人たちもローン・ボウルズに興じていたことが記録されている。フランシス・クォールズの『エンブレム集』(1635)第1巻第10番は、ボウルズを主題にした短詩である。クォールズは「ジャックは浮世、競い合う賭事師たちはキューピッドとマモン」(II. 31-2)と歌い、曲線を描いて転がるボウルを人間の魂にたとえて、天国に至る正しい道を導きたまへと神に祈る。いかにも宗教詩人らしい趣向であるが、クォールズが実際にボウルズに興じていたことは、以下の引用からも明らかだろう。<sup>(5)</sup>

見よ、いかに湾曲した体が絡まり、ねじれるか、  
プロテウスも知ることのなかった奇妙な格好だ。  
悪罵を飛ばす者あり、悪態をつく者あり、  
これほど上手く投球できず、これほど悪くもない。  
痒くもない肘を擦り、肩をすくめ、笑い飛ばす者、  
突き出た眉をしかめて擦る者もあり。  
時に歓声を上げ、時に陰鬱な叫び声が  
暗いサンクトゥスを赤らんだ空に送るのだ。

(II. 13-20)

ちなみに「プロテウス」は変身能力を備えた海神のひとりで、「サンクトゥス」は「聖なるかな」

を意味するミサ曲の一節だが、ここではもちろん罵りの言葉として使われている。

伝記作家ジョン・オーブリーは『名士小伝』(1681)において、詩人ジョン・サックリングが「当時随一の伊達者にして、ボウリングとカードでも最大の勝負師であった」ために、彼の姉妹たちはペカディオのボウリング・グリーンにやると来ると、兄が自分たちの持参金をすっかり失ってしまうのではないかと心配して泣き声を上げたと伝えている。<sup>(6)</sup> サックリングは短詩「詩人たちの会合」で自らを「運動競技ほど詩神たちを愛さず、目元の黒あざや、ボウルズの見事な命中を、機知の記念品よりも尊んだ」(II. 76-8)と描いている。<sup>(7)</sup>

またジョン・イヴリンは1658年8月14日の日記に「(エプソムの)ダーダズンズに行って、10ポンドを賭けてボウルズの試合に臨み、我々が勝った」と記している。<sup>(8)</sup> さらにサミュエル・ピープスの日記にもボウルズ関連の記述が散見される。1661年5月1日にはピーターズフィールドで「楽しく過ごし、我々と妻たちはボウルズに興じた」とあり、同年6月5日には「W・ペン卿と私はR・スリングスビー卿と共に、彼のボウリング・アリーでボウルズをやリ、良い運動になった。その後で家に入って、飲み、話をした」。1662年7月26日には「ホホワイトホール宮殿の庭園とボウリング・アリー(紳士淑女が今ボウルズをやっている最中)は見事な具合だ」、1664年8月6日の早朝には「W・ジョイスと私はグリーンで8時までボウルズの試合をした」といった具合である。<sup>(9)</sup>

## 2. ディリンガムの「スールヘイの転球場」

内乱という激動の時代にケンブリッジ大学の副学長を務めた詩人ウィリアム・ディリンガムが、ラテン語で書いた短詩「スールヘイ転球場」は、第3代ウェストモーランド伯爵の所有するボウリング・グリーンを舞台にしている。この詩は『さまざまな主題による詩集』(1678)が初出だが、後にアディソンの「転球場」と並んで『2つの大学による詩集』(1698)に収録された。<sup>(10)</sup> ブラド

ナーは、トマス・マスターのラテン詩「銭当て」がディリングガムの「転球場」に影響を与え、さらにマスターあるいはディリングガムの作品がアディソンの「転球場」を生み出す契機となったと推測し、作品の舞台が特定されている点でディリングガムがアディソンよりも優れていると評価する。<sup>(11)</sup> 本稿はハーンの英訳をテキストに選ぶ。<sup>(12)</sup>

作品はピーターバラにあるスールヘイ周辺の自然描写で始まり、続いてボウリング・グリーンの整備が語られる。芝生がきれいに刈り取られた後に、石のローラーがその上を平らに均して、ボウルの進行を妨げないように入念に手入れされる。ここに一団の貴紳たちが「心から憂いを追い出す」(1. 14) ために定められた日に集い、ゲルフ(教皇派)とギベリン(皇帝派)と呼ばれる2組に分かれるが、「狂気」(1. 17)と「貪欲」(1. 18)はどちらも追い払い、法外な賭けも慎んで、純粋に競技を楽しもうと説かれる。召使の少年が片側に浴けた鉛を入れたボウルを小屋から持ってくると、いよいよ競技が開始される。

最初に登場するのは「英雄シルヴィウス」(1. 30)で、大いなる勇敢さと卓越した技術を兼ね備えている。対する敵軍の将「ナイサス」(1. 43)も劣らぬ技量の持ち主で、この二人をそれぞれ長とする二組が丁々発止の競技を繰り広げる。シルヴィウスがジャックに寄せたボウルを、ナイサスのボウルが弾き飛ばす。以降のボウラーたちは二人のように巧みに投球することはできず、ボウルの後を四つん這いになって追いかけて、疾走するボウルに止まれと声をかけたり、のろのろと動くボウルを叱責したりという有様だ。ボウルに「助言し、励まし、褒める」(1. 58)や、「体をねじ曲げて」(1. 58)という表現は、クォールズの詩やコットンの記述にも見られたもので、ボウルズの投球に苦勞する描写としては定番と言えよう。

ディリングガムはボウルズの競技を描く上で、叙事詩の戦闘場面を比喩として用いている。あらゆるボウルに囲まれるジャックは、『イーリアス』で多くの勇者たちから求婚された後に、夫メネラオスを裏切ってパリスと出奔する「ヘレナ」(1. 36)

に喩えられ、彼女の腕の中で安らぐ者は幸福だと歌われる。またナイサス側のボウラーたちが、指揮官のボウルを守ろうと自分たちのボウルで囲むさまは、宿営地で危険が生じた際に將軍を守ろうと、彼のまわりを囲むローマ軍兵士になぞらえられる。

シルヴィウス側のボウルがすべて、ナイサス側のボウルによって場外へ弾き飛ばされた後に、ふたたびシルヴィウスの投球する番がめぐってくる。彼は「勇敢さにとって通せない道はない」(1. 86)と豪語してカー杯投球するや、彼のボウルは敵のファランクス(重装歩兵による密集隊形)を突き抜けてバラバラにし、あちこちに死をまき散らしながら、ジャックに命中する。かくして仲間たちは歓呼の声を上げ、森のニンフたちはシルヴィウスの名を何度も木霊させるのであった。ディリングガムの「転球場」は一般にはまったく知られていないが、叙事詩の表現を巧みに織り込みながら、競技者たちの熱い戦いを描いた佳品であると言えよう。

### 3. アディソンの「転球場」

ジョウゼフ・アディソンの「転球場」は、ラテン語で書かれた66行の短詩で、ディリングガムの「スールヘイの転球場」と並んで『2つの大学による詩集』(1698)に収録され、『折々に書かれた詩集』(1719)ではニコラス・アマーストによる84行の英訳も掲載された。<sup>(13)</sup> サットンやハーンによる現代の英訳に比べると、彼の訳はやや修飾過多とも思えるが、いかにも疑似英雄詩という印象を与える訳業なので、本論ではアマースト訳を採用する。<sup>(14)</sup>

ブラドナーはこの詩を含めて17世紀の終わりに書かれたラテン語の競技詩(他には熊いじめ、闘鶏、スケートなどを描いた詩がある)が「疑似英雄詩」を思わせるとして、「これらのよく知られた競技をラテン語の六歩格にあてはめることは、作者と読者の双方にとって喜びの源であったに違いない。これに加えて、読者は通例これらの

詩に、いささかの迫真力のある描写や、田園生活の魅力的な描画を見出すことになる」と述べている。<sup>(15)</sup> 同様の見解は『折々に書かれた詩集』の序文にも見られ、筆者とされるジョージ・シュウエルは、ラテン語で書かれた3篇「ピグミーと鶴の戦い」「人形芝居」「転球場」が「疑似英雄詩に属し、主題は卑近で取るに足らず、詩的な装飾は不可能なように見えるが、表現の輝かしい大胆さと詩行の壮麗さによって、また高遠な等級の作品（叙事詩）から引き出された暗喩、引喩、類似によって、英雄詩にまで引き上げられている」と評する。<sup>(16)</sup>

だがジョンソンは『詩人伝』（1779-81）で「ラテン語で書かれた3篇、「ピグミーと鶴の戦い」「気圧計」「転球場」について、「自分の言語ならばあえて書こうとはしなかったであろう主題に基づいている。主題が卑近あるいは貧弱ならば、親しみがまったくないために卑しいものがまったくない死語は、大いなる重宝さをもたらす。ローマの音節の音響的な荘厳さによって、詩人は思想の貧困さと新奇さの不足を、読者と自分自身から覆い隠すのである」と非難する。<sup>(17)</sup> シュウエルとジョンソンの批評に見られるのは、卑近な主題を荘厳な表現で描くという疑似英雄詩に対する両極的な態度であり、ラテン語で作詩することへの相反する判断であろう。

アディソンの「転球場」は、ディリンガムの詩と同様に牧歌的な雰囲気をもたえた朝の描写で始まる。

夏の海のように滑らかで平坦な、  
 広大な区域が野原に開けている。  
 下りた露で草花は汗をかいており、  
 昇りゆく太陽の強い熱を感じていない。  
 研がれた大鎌が草深い高地を予め準備し、  
 夜のわずかな収穫を刈り取っていく。  
 転がる石が朝の勝負を再開し、  
 伸びた芝生を粉碎し、瘤だらけの地面を沈ませる。

(II. 1-8)

ここでは「研がれた大鎌」や「転がる石」（ローラー）が擬人化されており、実際に作業を行う人間の姿が描かれることはなく、後に示すように、サマヴィルの描写とは大いに異なる。競技の舞台となる緑地がどこかは不明だが、きちんと手入れされた競技場であることは間違いない。ディリンガムの作品の舞台がウェストモーランド伯爵の転球場であったように、ボウリング・グリーンは個人の邸宅に設けられることも少なくなかったようで、おそらくは貴顕の庭園の一部であろう。磨き上げられた球は柔らかい緑の表面をすばやく疾走するように「油で輝いて」（I. 11）おり、競技者たちは自分のボウルが分かるように目印を付ける。

数名ずつが2組に分かれて、いよいよ競技の開始である。ボウラーたちの名前は明記されず、身分も職業も定かではない。

各々の長は武器を取り上げ、標的用の球が  
 飛び上がって表面を転がるのを見つめる。  
 ボウラーたちは送り出した球で標的を狙い、  
 一番近くに達した者が試合の勝者となる。  
 長は手の中で球の釣り合いを取り、  
 遠いゴールを目がけて優しく放つのだ。

(II. 21-6)

次々と楕円を描きながら投球が続き、ジャックの周囲にはボウルが散らばって障害物と化し、緑地をすっかり封鎖してしまう。もはやボウルをジャックに接近させる隙間はなくなったかのように思われる。

今や巧みな技で、すばらしい注意を払って、  
 器用な若者は木製の戦鬪を再開すると、  
 残りの球を越えて、くねる木玉は飛び、  
 徐々に入り込むように動き、賞品を勝ち取る。

(II. 33-6)

しかし投球のすべてがうまく的を捉えるわけではない。ボウルがジャックに達しないことが分かると、投球者は腰を屈めて転がるボウルの上をう

ろつき、失投の原因を盛り上がった芝生や罪深い地面に帰して、自分の腕前のせいではないことをしきりに強調する。

どんな急な笑いが緑地に響きわたるか、  
 どんな不運な、ぶざまな投球が見られるか、  
 あまりにも重すぎる鉛が、屈強な力で  
 定められた進路から球を誘惑する時には。  
 ボウラーたちは追いかけて、実りない激情が続き、  
 体をありとあらゆる姿勢にねじ曲げる。  
 彼は怒りに血をたぎらせ、自分の無知を非難し、  
 苛立ち、足を踏み鳴らし、さまよう球を呪う。  
 さまよう球は彼の実りない激情を軽蔑し、  
 それまでの気まぐれな進路をなおも維持する。

(II. 45-54)

投球の際に体を奇妙な格好にねじ曲げたり、ボウルに対して無意味な悪態をつくといった詩行は、コットンの戯文めいた記述やクォールズの軽妙な詩行、さらにはディリングガムの描写とほぼ同じである。アディソンが彼らの影響を受けたかどうかは定かではないが、いずれも滑稽さを狙っているという点では共通する。

もちろん見事な投球は仲間たちの称賛や喝采を受けることができる。

だが、もしボウルが均等な力で放たれ、  
 意図した長さを正確に得たとすれば、  
 群れあうボウルズを見事にすり抜けて斜行し、  
 静止したジャックにかぶさるように止まれば、  
 大きな喝采で割れんばかりの天を引き裂き、  
 皆が投球者と投球を褒めたたえるのだ。

(II. 55-60)

かくして競技は終わり、手足を塩辛い汗でびしょりと濡らしたボウラーたちは、微風と涼を求めて木蔭で安らぐのであった。アディソンの「転球場」は具体的な名辞をことごとく省略しており、舞台が不明であるばかりか、競技者たちがどのような人物なのかは一切明らかにされない。その点

で少々物足りない感じがすることは否めない。

#### 4. サマヴィルの「転球場」

ウィリアム・サマヴィルは有閑階級に属する郷土・詩人で、『狩猟』(1735)、『ホビノル、すなわち田園の競技』(1740)、「野外の狩り」(1742)を始めとする彼の作品には優れた描写力と豊かなユーモアが見られ、ここで取り上げる「転球場」(1727)もその例に漏れない。<sup>(18)</sup> ボンドが「この詩には穏やかなバーレスクと滑稽な描写の両方の特質がある」と述べ、サムブルックがサマヴィルの「バーレスクの才能は、生き生きとして滑稽なヒロイクカプレットで書かれた、オーガスタン期のささやかな疑似英雄詩『転球場』に、見事に示されている」と評する所以である。<sup>(19)</sup> またサマヴィルは上記の3篇を始めとして、作品の大半をミルトンやジョン・フィリップスに倣ったブランク・ヴァースで書いているが、「転球場」は例外的にヒロイクカ・カプレットの形式で書かれている。

冒頭はディリングガムやアディソンの詩と同様に、ボウリング・グリーンの整備から始まる。

美しいサブリナの流れが蛇行していくところ、  
 大きく滑らかな平野がその緑なす額を広げており、  
 ここでは朝が来るたびに、実りある水分が膨らんだ  
 葉身を養い、霧にけぶる草叢を祝福している間に、  
 残忍な暴君が支配する。時のごとくに、農夫は  
 邪なる大鎌を研いで、平野の草を根こそぎにする。  
 鎌を揮うたびに、その下で覗き見る花々は移ろい、  
 まだ熟してしない作物はみな一掃されてしまう。  
 農夫は次に重々しいローラーを引っ張ってきて、  
 短いパイプを吸い込み、田舎風の歌を歌い出す。  
 そして詮索する目で押し潰した芝生を眺めて、  
 飛び出している草を一本残らず服従させるのだ。

(II. 1-12)

「サブリナ」はミルトンの『コーマス』でもお馴染みのセヴァーン川に住むニンフで、サマヴィルが暮らしたグロスターシャーが舞台と目される。

「残忍な暴君」や「時」（死神のイメージが付加されていることは言うまでもない）と呼ばれる農夫は、研いだ「邪な大鎌」でグリーンの草を刈り取り、ローラーをかけて草を残らず服従させる。これはディリングムやアディソンには見られなかった視点であり、ボウリングという娯楽のために、生育しつつあった草や作物は、鼻歌まじりの農夫によって根こそぎにされてしまうのだ。

準備された食物で腹を満たした雑多な階層の人々は、グリーンに集って競技の開始を待つ。サマヴィルの筆遣いはバーレスクというよりも諷刺に傾いている。

ボタンの法服を身に着けた小綺麗な弁護士、  
薔薇色の頬をして、太った、正統派の牧師、  
あらゆる党派、ホイッグ、カトリック、高教会、  
妻を寝取られた参事会員、尻に敷かれる郷土、  
狐の狩人、藪医者、へぼ詩人に三文文士、  
半給の船長に、うすら馬鹿の伊達男などだ。

(II. 17-22)

いよいよ競技者が二人一組になって登場し、磨き上げられたボウルには各組を表わす印がつけられている。賞品となる銀色の杯が高々と掲げられ、ジャックが投球者の道標となって向こう側に置かれる。最初の投球者は医者バンドである。

バンドが最初に服を脱ぐ、彼は外国の岸から  
混沌とした処方箋と無秩序な思想を持ち込んだ、  
外国では混乱した気紛れが党派に屈伏して、  
常に君主たる理性を玉座から押し退けるのだ。  
彼の鷺ペンはヤマアラシの針よりも危険であり、  
殺戮に慣れ切って、確信を持って人を殺す。

(II. 38-43)

バンドのボウルは「下界を離れる患者のように速やかに」(I. 53) グリーンから外れてしまい、本人は悪意を持って歯を剥き出すが、見物人は彼の理由のない怒りを嘲笑するばかりである。

おそらくバンドのモデルと目されるのは、放

蕩や喧嘩や飲酒で悪名高い17世紀の宮廷詩人口チェスター伯ジョン・ウィルモットである。彼は1676年に痛飲して夜警と争った末に、友人の一人が亡くなったことが原因で、にわかにな身を隠すためにイタリア人医師アレキサンダー・ベンドに扮して、街中で不法な医療行為を行った。ロチェスターの小伝を書いたバーネットは、「ある不運な事件のために人目を忍ばざるを得なくなった彼は、ごく親しい友人でも見分けられないほどに変装し、タワー・ストリートにイタリア人のえせ医者として現われ、そこで数週間の医療を施したが、まずまずの成功を収めた」と記している。<sup>(20)</sup>

ロチェスターはタワー・ストリートにある「ブラック・スワン亭」の隣にある金細工師の家で、3時から8時まで開業するにあたって、アレキサンダー・ベンドの名を冠した宣伝ビラを作成した。その一節には「安全で、穏やかで、間違いのない薬を用い、食物に関する多少の規則を守ること、患者を完全に治療し、歯のぐらぐら、壊血病の斑点、食欲の減退、手足や関節の痛みや倦怠など、あらゆる症状から解放します」とある。<sup>(21)</sup> えせ医者バンド＝ロチェスターが治療を誤って人を殺したという記録はないが、このビラは17世紀に公刊されたロチェスターの詩集にも収められており、サマヴィルはこれを参考にしたものと推測される。

続いて競技場上がるのは、横柄な司祭たるザドクである。

教会には常に遅刻するが、饗宴には一番乗りだ。  
雄の七面鳥もこれほど優美な姿はしていない、  
黒い僧服に身を包み、顔は深紅に染まっている。  
きつく絞めた帯からたるんだ肉が垂れ下がり、  
彼の駄馬のような足は投球線の上に立って、  
がさつで筋骨たくましい手でボウルをつかむ。

(II. 57-62)

投げられたボウルは左に大きく逸れて進み、ザドクはぼてぼてと後を追いつつながら、叱責と懇願を混ぜ合わせ、引力と磁力によってボウルの進路を

調節しようと、不恰好な体をさまざまな形によじる。コットンやクォールズを始めとして、これまで見てきた作品とまったく同様に、ザドクの祈りも叫びも報われることはないのである。なおザドク（ツァドク）という名は「義の人」を表わし、ダビデの祭司として「サムエル記」や「列王記上」に登場するが、王位継承においてはソロモンを支持して、彼の頭に油を注いで聖別したことでエルサレムの祭司職を独占することになった。王の戴冠を司る祭司ザドクを、サマヴィルは滑稽な人物に貶めてしまったわけである。

ところでサマヴィルが「転球場」を収録した詩集を發表した1727年は、ジョージ1世が崩御してジョージ2世が即位した年に当たる。そして戴冠式における注油式の際に演奏されたのがヘンデルの「戴冠式アンセム」であり、そのなかには「祭司ザドク」という曲が含まれている。その歌詞は「列王記上」第1章39-40節から取られたもので、新共同訳では「祭司ツァドクは天幕から油の入った角を持って出て、ソロモンに油を注いだ。彼らが角笛を吹くと、民は皆、『ソロモン王、万歳』と叫んだ。民は皆、彼の後に従って上り、笛を吹き、大いに喜び祝い、その声で地は裂けた」となる。

ジョージ1世が亡くなったのは6月11日、そしてジョージ2世が戴冠したのは11月22日のことである。サマヴィルが書肆リントットから詩集の報酬を受け取ったのは7月14日であるから、<sup>(22)</sup>詩人がヘンデルの「祭司ザドク」を知っていた可能性は少ないと思われる。しかし「祭司ザドク」は973年のエドガー王以来すべての戴冠式で歌われており、1727年以降はヘンデルが作曲した曲が使われているという。<sup>(23)</sup>1685年のジェイムズ2世の戴冠式の模様を詳細に記したサンドフォードによれば、「祭司ザドク」は注油式に先立って第4アンセムとして歌われており、歌詞はヘンデルが用いたものと同じである。なお1685年の演奏ではヘンリー・ローズの曲が用いられた。<sup>(24)</sup>

さてベンドはグリーンを用心深く観察した後あまり力を入れないようにして二投目を押し出す、彼には「格別の呪い」(I. 84) がかけられて

いるかのように、ボウルは途中で止まってしまう。一方で黒ビールを3杯重ねて陽気になったザドクは、希望に顔を赤くしながらボウルを放つが、やはりジャックまで達することなく止まってしまう。サマヴィルは「我々は砂上に城を建て、我々の幸福も夢にすぎぬ」(I. 107) と、ザドクの失投を人生の虚しさに喩えてみせるが、これも先行する作品にしばしば見られたものである。

続いて二人目の競技者たちが現われる。まずは熟練の老戦士たる法律家のグライパー（悩ませる者、不平を言う者、欲張ってつかむ者などの意）で、彼に賭ける者が裕福であれば慇懃になり、貧しければ顔をしかめるといふ御仁である。グライパーの投じたボウルは、ジャックの間近に止まったかと思われたが、最後にぐらりと傾いて「木球と接吻した」(I. 145)。彼に賭けた者たちは大声で喝采するが、敵対する者たちは一斉に顔を曇らせる。なかでもトレベリウスは鉛色の顔に痛ましい雰囲気をつかべ、周囲の者たちに忠告を与えるが、誰も聞く耳を持たない。おそらく彼のモデルとなったのは、ローマ支配下のブリタンニア総督トレベリウス・マキシムスで、タキトゥスによれば「強欲と卑しい根性から兵士に侮られていた」が、軍団長コエリウスと仲違いしている間に軍隊の風紀は乱れに乱れ、ついにトレベリウスは総督の座を打ち捨てて逃げ出したという。<sup>(25)</sup>

最後に登場するのは本編の英雄ともいべき狩人のニムロドである。ニムロドは「創世記」第10章に「勇敢な狩人」として登場するが、狩猟詩に本領を發揮したサマヴィルには当然の選択と考えられ、『狩猟』(1735)にも「大胆なニムロド、あの強大な狩人」(I: 36-7)とある。<sup>(26)</sup>これに先立ってポープは『ウィンザーの森』(1713)で「誇り高いニムロドが最初に血なまぐさい狩猟を始め、強大な狩人となったが、獲物は人間であった」(II. 61-2)と歌い、狩人であると同時に暴君としてのニムロドを描いた。<sup>(27)</sup>(27)一方ゲイは「郷土の誕生」(1720)で「いかに若者は筋肉を引き締め、血管を熱くして、野原の強大なニムロドとなって騎乗したか」(II. 27-8)とあくまでも狩人として

ニムロドを描く。(28)

今や強きニムロドは、昇る朝日のごとく鮮やかに姿を現わす。彼のたくましい手足と締まった筋肉を見つめる群衆は嘆賞する。彼が喜びを得るのは宮廷でも壮麗な舞踏会でもなく、田園の狩りこそ彼の魂の歓びなのだ。角笛の小気味よい合図に、彼は嫌がるフィリスを腕から振り解いて、太陽とともに起き上がり、大胆に疾走を始め、狡猾な狐やそぞろ歩く鹿を追いかけるのだ。

(II. 158-65)

この直後にサマヴィルは思わず狩猟の生き生きとした描写を始めてしまうが、「だが踏み迷った詩神はどこに快い主題を追い求め、過去の喜びを新たにするか」(II. 176-7)と自戒して、転球場に話を戻す。ニムロドの初球はすでに置かれたボールを次々と弾き飛ばしていく。

… パルティアのイチイで作った弓のように彼は腕を後に振り上げて、旋回するボールを放つと、ボールは全力で疾走する。ボールがボールにぶつかり、野原一面が混乱をきたし、敵将は従者によく覆われ、安全に止まっていた。あたかも衛兵が襲撃された暴君を守って、朋友たちの破滅によって逃れるかのごとし。だが今や秩序は乱れて、敵将は剥出しになり、次の決定的な投球を恐れているかのようだ。血なまぐさい包囲を目がけて、重々しいボールが止まらぬ猛威で壁を打ってぼろぼろに崩し、(裂目が一度できると)すぐに裸の町は苛立ち、血を浴びて騒乱し、山となって投げ捨てられる。

(II. 180-92)

ここで叙事詩における戦闘場面を思わせるイメージが用いられていることは明らかで、ニムロドの強烈な投球によって、ジャック(暴君・町)を囲むボール(衛兵・壁)はほころびを見せ始める。引用中ほどの兵隊たちが我が身を犠牲にして将を守るという一節は、ディリングムの「スール

ヘイ転球場」にも見られたが、サマヴィルが彼の作品を読んでいたかどうかは不明である。

続くグライパーの二投目は静かに輪を描いて進み、ジャックを見えないように覆ってしまう。まるで「小さなテウクロスが兄弟の盾の背後で安全に、こそこそ歩いて戦場でよく戦ったがごとし」(II. 200-1)と、ここでも『イーリアス』第8巻に基づいた比喩が使われている。(29)

九人目に現われたのはテウクロス、折り曲げて弦を張る弓を携えて、テラモンの子アイアスの構える大楯の蔭にもぐり込む。アイアスが楯をずらすと、テウクロスは機を窺って、群がる敵兵の一人に矢を放って射当て、敵がその場に倒れて息をひきとると、あたかも幼な子が母のかけに隠れるように、再びアイアスの楯の下へもぐり込む。そのたびにアイアスが輝く楯で彼の身を隠してやった。

テウクロスはギリシアの勇者たちを次々と倒すトロイアの優れた射手である。だがサマヴィルはグライパーの技量は認めながらも、英雄ニムロドの偉業を強調するために、故意にグライパーを矮小化して描くのである。

困惑したニムロドはグリーンを隅から隅まで検分し、正面からは少しも空きがないことを見取ると、カーブをかけた二投目を放つ。

芝生の上をするすると滑走しながら、従順なボールはあてにならぬ進路を維持する、希望と不安が各々の胸に代わる代わる寄せては返していく。今や球は的を目指してどンドン近付いていき、それから強力な錘に制御されて、進路を変え、まだ残っていた力を敵に対して解き放った。その一撃は手厳しく、仇敵は逃れ去った、大胆な乱入者が敵の代わりに勝利を収めた。

(II. 209-16)

最後の投球の描写が盛り上がり欠けることは否めないが、勝ち誇るニムロドは賞品をつかみ、



観客の「手と、舌と、杯が勝者の名声を高め、サブリーナの岸辺も大きな喝采を彼に返すのだ」(II. 219-20)と締めくくられる。サマヴィルの「転球場」は諷刺めいたユーモアに彩られており、叙事詩を想起させる比喩や表現、生き生きとした競技者たちの描写などを考え合わせると、ポウルズの試合を描いた3つの作品のうちで、疑似英雄詩としてもっとも優れていると言えよう。

注

(1)「アディソンの『ピグミーと鶴の戦い』」『駿河台大学論叢』第57号(2018)160-7. および「パーネルの『鼠と蛙の戦い』」『駿河台大学論叢』第56号(2018)163-9. を参照。

(2)Charles Cotton, *The Compleat Gamester* (London: A. M for R. Cutler, 1674) 47-8.

(3)Joseph Strutt, *The Sports and Pastimes of the People of England*, ed. J. Charles Cox (1801; London: Methuen, 1903) 216-9.

(4)*Cassell's Book of Sports and Pastimes* (London: Cassell, 1891) 295-6.

(5)*The Complete Works in Prose and Verse of Francis Quarles*, ed. Alexander B. Grosart, 3 vols (Printed for Private Circulation, 1881) 3: 52-3.

(6)John Aubrey, *Brief Lives*, ed. Kate Bennett, 2 vols (Oxford: Oxford University Press, 2016) 1: 367-8.

(7)John Suckling, "A Session of the Poets," *The Works of Sir John Suckling (The Non-Dramatic Works)* ed. Thomas Clayton (Oxford: Clarendon Press, 1971) 74.

(8)*The Diary of John Evelyn*, ed. E. S. de Beer, 6 vols (Oxford: Clarendon Press, 1955) 3: 219.

(9)*The Diary of Samuel Pepys*, ed. Robert Latham & William Matthews, 11 vols (Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1981) 2: 92, 115, 3: 146, 5: 233.

(10)William Dillingham, "Sphaeristerium Suleianum," *Poemata Varii Argumenti* (London: E. Fleisher, 1678) 56-9., *Examen Poeticum Duplex* (London: Ric. Wellington, 1698) 29-33.,

(11)Leicester Bradner, *Musae Anglicanae: A History of Anglo-Latin Poetry 1500-1925* (New York: Modern Language Association of America, 1940) 204. 盤上で硬貨などを弾いて得点を争う Shovel-Board を主題にしたマスターの「銭当て」については William Poole, "Thomas Master and the Mensa Lubrica: a Seventeenth-Century Gaming Poem," <https://www.new.ox.ac.uk/sites/default/files/3NCN6%20%282013%29%20Poole%20-%20Master%20and%20the%20Mensa%20Lubrica.pdf> を参照。

(12)Estelle Haan, *Sporting with the Classics: The Latin Poetry of William Dillingham* (Philadelphia: American Philosophical Society, 2010) 76-81.

(13)Joseph Addison, "Sphaeristerium," *Examen Poeticum Duplex* 34-7., "The Bowling-Green," trans. Nicholas Amhurst, *Poems on Several Occasions* (London: E. Curll, 1719) 109-20.

(14)Dana F. Sutton, *The Latin Prose and Poetry of Joseph Addison* (<http://www.philological.bham.ac.uk/addison/translation.html>, 2005) , Estelle Haan, *Vergilius Redivivus: Studies in Joseph Addison's Latin Poetry* (Philadelphia: American Philological Society, 2005) 163-4.

(15)Bradner, 221.

(16)*Poems on Several Occasions*, xii.

(17)Samuel Johnson, *The Lives of the Most Eminent English Poets*, ed. Roger Lonsdale, 4 vols (Oxford: Clarendon Press, 2006) 3: 2-3.

(18)William Somerville, "The Bowling Green," *Occasional Poems, Translations, Fables, Tales* (London: Bernard Lintot, 1727) 67-80.

(19)Richmond P. Bond, *English Burlesque Poetry 1700-1750* (Cambridge: Harvard University Press, 1932) 333., A. J. Sambrook, "William Somerville," *Restoration and 18th-Century Prose and Poetry excluding Drama and the Novel* (London: Macmillan, 1983) 161.

(20)Thomas Burnet, *Some Passages of the Life and Death of the Right Honourable John Earl of Rochester* (London: Richard Chitwell, 1692) 27.

(21)Anthony Hamilton, *Memoirs of the Count de Gramont*, 2 vols (London: Vizetelly, 1889) 2: 283-9., Thomas Alcock & John Wilmot, Earl of Rochester, *The Famous*

*Pathologist or the Noble Mountebank*, ed. Vivian de Sola Pinto (University of Nottingham, 1961) 35.

(22) John Nichols, *Literary Anecdotes of the Eighteenth Century*, 9 vols (London: Printed for the Author, 1814) 8: 301.

(23) <https://www.westminster-abbey.org/media/7143/coronation-service-guide-reading-list.pdf>

(24) Francis Sandford, *The History of the Coronation of the Most High, Most Mighty, and Most Excellent Monarch, James II* (London: Thomas Newcomb, 1687) 91.

(25) タキトウス『同時代史』 國原吉之助訳 (ちくま学芸文庫, 2012) 69-70.

(26) William Somervile, *The Chase* (London: G. Hawkins, 1735) 1: 3-4.

(27) Alexander Pope, "Windsor-Forest," *Pastoral Poetry and An Essay on Criticism*, eds. E. Audra & Aubrey Williams (London: Methuen, 1961) 155.

(28) John Gay, "The Birth of the Squire," *Poetry and Prose*, eds. Winton A. Dearing & Charles E. Beckwith, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1974) 1: 231.

(29) ホメロス『イーリアス』 松平千秋訳 全2冊 (岩波文庫, 1992) 上 247.

本稿は科研費の基盤研究C「十八世紀英詩におけるバーレスクと民衆文化」(課題番号 18K00380) による成果である。